



## 第4回大会報告

### ◆ 第4回大会報告

#### 坂口正道

広報担当（大阪大学）

おかげさまで日本バーチャルリアリティ学会第4回大会も無事終了致しました。実行委員会では、大会を運営いたしました実行委員、セッションを進行していただいた座長の先生方、および大会参加者の方々に本大会の報告や感想をご執筆いただき、大会報告としてまとめました。第4回大会の様様をここにとどめるとともに、参加していただけなかった方々にも、少しでも本大会の雰囲気を感じていただければ幸いです。なお、本報告に掲載の写真は、北村喜文氏（大阪大学）の撮影によるものです。本開催報告は、日本バーチャルリアリティ学会第4回大会ホームページ（<http://www-human.eie.eng.osaka-u.ac.jp/vrsjac99/>）にも掲載しております。

### ◆ 実行委員からの報告

○ 総括

#### 岸野文郎

大会長（大阪大学）

第4回大会は、9月29日（水）から10月1日（金）まで奈良県新公会堂（ビッグルーフ）で成功裏に開催されました。最新の成果をご発表いただいた方、熱心に聴講・討論いただいた方、展示いただいた方、運営にご協力いただいた方に厚く御礼申し上げます。関西方面で大会開

催の打診を受けた時から、最新のVRの成果は古都奈良で、かつ能舞台での発表が最新技術と古代歴史との対比で趣き深いと思っていましたので、会場はすぐに決まりました。過去最高の143件の発表件数と400名を越す参加者数は、学会として益々活発化している証拠であり、館会長はじめ関係各位のご努力の賜物だと思います。

できるだけ多くの方に参加していただくこと、事前に開催情報を記者クラブに流してPRに努めました。その時、記者の方から、論文発表は専門家でないと理解できないだろうが、展示は体験して楽しめるので一般公開してはどうかとのアドバイスを受け、実演発表と機器展示に限って、参加費無料の一般公開を初めて実施しました。ホームページからの申込みという制約を付けたものの、70名を超える申込みをいただき、中には面白そうなので講演も聞きたいとのことで、会場で通常の参加登録をして参加された方もおられました。展示された方にとっても、できるだけ多くの方に見てもらうことができたと好評でした。PRの効果として、地元テレビ局の取材も受け、夕方のニュースで放映されました。この様子は早速録画されて懇親会場で上映され、大いに喝采を浴びました。

招待講演は、前回講演いただいた東宝の特撮監督川北紘一氏のご紹介によりSF作家の小松左京氏をお招きすることができました。実は事前打合せと称して2週間前に3時間ほど高説をお伺いすることができ、帰り際には持参した「さよならジュピター」の本にサインもいただきました。その頃は夏ばて気味とのことで心配していましたが、当日は颯爽とお越しになり、講演に先立ち展示もご覧いただきました。講演直前に前大会と同様に掛合いにしようとの提案があり、非常に焦りました。その心配も杞憂に

終わり、「SF作家になられた動機、きっかけについて学生時代の過ごされ方も含めてお話してください」との最初の質問に、戦時中の体験、大学時代に感じたこと、「日本沈没」を書くことになったきっかけや科学的裏付けに苦労したこと、「さよならジュピター」の映画制作時の苦労話などを一気にお話しいただきました。固有名詞、年代が次から次へ出てきて記憶力の確かさに感心しました。その後も殆ど質問する暇もなく、いろいろなお話をいただきましたが、詳細な内容は写真とともに本誌に掲載されておりますのでご覧ください。背景には、川北監督に纏めていただいた「さよならジュピター」と「日本沈没」のダイジェスト版が流され、一層の効果を高めることができました。若い世代の方には馴染みの少ない固有名詞が含まれていたのが心配です。

幸い大会期間中は3日間とも好天に恵まれ、奈良公園内の会場での開催は参加者の皆さんにご満足いただけたのではないかと思います。

#### ○ 幹事・プログラム担当からの報告

### 北村喜文

幹事（大阪大学）

バーチャルリアリティ学会大会は本年で第4回を迎えましたが、これまでの実行委員の先生方のご努力により、昨年の第3回大会まで、大会のスタイルは確立されていたのではないかと思います。そこで本年の大会では、このスタイルの大枠は大切に踏襲した上で、“関西”の地域性を生かして、さらに充実させて行きたいと思いました。そのため、我々大阪大学のメンバーだけではなく、奈良先端科学技術大学院大学、ATR知能映像通信研究所、松下電工株式会社など、関西を代表するVR拠点の皆様には実行委員のコアメンバーとして大会運営の中枢に加わっていただき、知力・体力と貴重なお時間をずいぶん割っていただきました。

発表論文の数は第1回大会以来順調に増加してきており、本年はついに143件となりました。この盛況ぶりは、大会を運営する立場からは嬉しいことではありましたが、プログラムの編成の一部に無理を強いる結果となりました。つまり、十分な質疑応答の時間が取れない、セッション間ごとに十分な休憩が取れない、などです。これらの点について、不自由をおかけした皆様にはおわびいたします。来年度以降もこのまま発表件数が増加するのであれば、何らかの工夫が必要かもしれません。

本大会では、皆様への大会に関する情報の伝達とお申し込みなどの登録に、ホームページと電子メールを中心に

利用いたしました。中にはエラーなどでご不便をおかけした方もいらっしゃったようですが、結果として400名を越す方々のご参加をいただき、まずは最低限度の機能は果たすことができたのではないかと考えております。ただ、せっかく非常に多くの方にアクセスしていただけたのに、ホームページはあまりにも機能重視で、デザインの面まであまり気を配る余裕がなかったのが悔やまれる点です。これに対して、本大会のポスターは、東京大学の河口洋一郎先生にすてきなデザインで作っていただきました。各方面へお送りして積極的にPRさせていただくとともに、大会当日は、本学会の大会らしい受付の装飾にも活用させていただきました（写真1）。

会場では、来年度以降の大会をより良くするため、ご参加いただいた皆様にアンケート用紙を配らせていただきました。回答を寄せていただきました内容の一部は、本大会報告の最後に掲載させていただきます。

最後になりますが、さまざまな角度から積極的に本大会にご参加いただき盛り上げてくださった皆様と本大会実行委員の先生方、過去これまでの大会を成功に導き、有益なノウハウを残してきていただいた歴代の幹事の先生方をはじめとする実行委員の皆様には感謝いたします。



写真1: 受付の様子

#### ○ 実演発表（技術展示／作品展示）機器展示の報告

### 野間春生

展示担当（ATR知能映像通信研究所）

日本バーチャルリアリティ学会大会での展示企画は、いづれも貴重な研究成果、あるいは、最新の製品を大会参加者に直接体験いただく場として、例年、好評を頂いております。本年は、実演発表として技術系展示9件と芸術系の作品展示4件、さらに最新の商用化VR関連装置の展示に20社の機器展示が設けられました（写真2、3）。

従来は展示条件などによって分散しておりました展示企画を、本大会では一つの大部屋に集約することができ、そのため、天井照明を落として各ブースへ個別照明を配置するといった構成となりました。このため、各ブースで